

コリヤーク語の属性叙述

——主題化のメカニズムを中心に——

呉 人 恵

富山大学

【要旨】 本稿では、コリヤーク語（チュクチ・カムチャツカ語族）で伝統的に「質形容詞」と呼ばれてきた形式が、実際には動詞をはじめとする形容詞以外の品詞語幹からの派生も可能であることや、主題化の形態的・統語的な現われである逆受動化や一般的な構造制約に対する違反などを示すことなどから、日本語研究発信の叙述類型論によって提案された「属性叙述」というタイプに相当することを論証する。また、属性叙述は対応する「事象叙述」と相互変換が可能であることを示し、これが、各品詞語幹が本来的にもつ時間的安定性の制限を解消するための戦略であることを指摘する。コリヤーク語のようにこれら2つの叙述タイプの違いを形態的にも統語的にも明確な形として具現化している言語はこれまで知られておらず、その意味で本稿は叙述類型論の視野を広げるひとつの重要なデータを提供しようと考えられる*。

キーワード：コリヤーク語、属性叙述、逆受動化、主題化、時間的安定性

1. はじめに

本稿は、北東シベリアに分布するコリヤーク語¹ (Koryak) で伝統的に「形容詞」とされてきた形式を、日本語の叙述研究の中で生まれた「属性叙述」(益岡 1987)

* 本稿の執筆にあたっては、大角翠氏、加藤重広氏、北上光志氏、野島本泰氏、野村和之氏、角田太作氏、山田祥子氏には属性叙述に関する貴重なコメントと助言をいただくことができた。記して感謝の意を表したい。また、査読の労を惜しまず貴重な指摘とコメントを下さったお二人の本誌査読者の方にも心からお礼を申し上げたい。言うまでもなく、本稿における不備はすべて筆者一人に帰するものである。なお、本稿は、平成19～21年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究B [海外学術調査]「危機に瀕した古アジア諸語の系統的・類型的多様性に関する調査研究」(課題番号:19401020, 研究代表者:呉人恵)により2008年9月、2009年2月ならびに9月におこなった現地調査で得られたデータに基づいて書かれたものである。調査には、コリヤーク語の母語話者として Ajatginina Tat'jana Nikolaevna 氏 (1955年マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第5トナカイ遊牧ブリガード生まれ、女性) に協力していただいた。ここに、記して謝意を表したい。

¹ コリヤーク語は、北東アジアのカムチャツカ半島北部から大陸側にかけて分布する言語で、チュクチ語、ケレク語、アリュートル語、イテリメン語とともにチュクチ・カムチャツカ語族を形成する。チュクチ・カムチャツカ語族はさらに、系統や類型を超え、シベリア生え抜きの言語としてまとめられている古アジア諸語のひとつにも数えられている。コリヤーク語には、チャヴチュヴァン、バラナ、バレニ、イトカン、カメン、アブカ、アリュートル、カラガの8方言が認められているが、本稿の対象となるのは、このうち正書法の基礎方言となったチャヴチュヴァン方言である。チャヴチュヴァン方言の音素は以下のとおり: /p, t, t', k, q, v, ʎ, ʎ', ɕ, m, n, n', ŋ, l, l', j, w, i, e, a, o, u, ə/. /t', n', l'/ はそれぞれ /t, n, l/ の口蓋化を表わす。/ç/ の音価は [tʃ]。

の視点からとらえ直すことを目的とする。

「属性叙述」とは、時間の流れを超越したモノの固定的・恒常的特性を描く叙述のタイプをいい、時間の流れに沿って展開する出来事、動作、状態を描く「事象叙述」というタイプと対立する。日本語にこの2つのタイプの叙述を区別する必要があることは、すでに佐久間(1941)、三上(1953)などでも指摘されてきたが、益岡(1987, 2004)、益岡編(2008)はこれらを発展的に継承し、「属性叙述」と「事象叙述」という明確な叙述類型として提示した。属性叙述は、対象を表わす部分と属性を表わす部分が相互依存の関係で結合することから、「主題-解説」という有題文の文型を取るとされているが(益岡2004)、日本語には主題を表わす「は」という明示的な形式があることが、いわば、属性叙述研究の進展を後押ししてきたともいえる。

最近ではさらに、影山(2004, 2006, 2008, 2009)、Kageyama(2006)が通言語的視点から、この2つの叙述タイプの区別が、単に概念上ではなく、形態構造と統語構造に影響を与えているさまざまな言語のさまざまな現象を取り上げ、考察を深めている。そこで分析されているのは、たとえば、日本語の外項複合語や「青い目をしている」文、英語や日本語の異常受身文、スペイン語の非人称再帰文、ロシア語の再帰接辞による動作主属性構文などであるが、これらはいずれも一般的な構造制約に違反しているにもかかわらず容認される異常な現象である。言い換えれば、事象叙述で用いられている既存の形態的・統語的操作を援用しつつ、そこに部分的な違反を起こすことで属性叙述機能を帯びている現象であるといえる。

これに対して、コリャーク語に特徴的なのは、形態的に属性叙述専用の明確な形式があることである。これは、従来のコリャーク語文法では、「質形容詞(kachestvennye prilagatel'nye)」(Zhukova 1972: 146)と考えられてきた、接頭辞 *n-* と語末につく人称接尾辞からなる形式(以下、N形)である。しかし、この形式は実際には形容詞という品詞の枠を超えて、名詞、動詞、副詞からも形成され、属性叙述機能を発揮している。一方、このN形は、統語的に見ると、影山(2009)の指摘のとおり、対応する事象叙述文の一般的な構造制約の一部、違反した、いわば「似て非なる」特徴を持っていることが観察される。

属性叙述機能がこのように形態構造においても統語構造においても明示的に認められる言語は、おそらくこれまであまり知られていなかったのではないと思われる。ちなみに、影山(2008: 22)は、「実際、筆者の知る限りでは、事象叙述と属性叙述の違いを特定の言語形式によって区別するという言語現象はどの言語にも見られない」と述べている。その意味で、コリャーク語は近年の叙述類型論の視野をさらに広げる可能性を持っている。

本稿では、以上のような前提を踏まえつつ、次の点について考察する。

- (A) コリャーク語の属性叙述専用の形式は、どのような形態的・意味的特徴を持っているのか?
- (B) 項-述語の文法関係が明確に確立した主語卓越型言語であるコリャーク語で

- は、どのような統語操作によって、事象叙述文から属性叙述特有の有題文が作られるのか？
- (C) 反対に、属性叙述文から事象叙述文が作られる際には、どのような形態的・意味的特徴が見られるのか？
- (D) 属性叙述と事象叙述の相互変換の背後には、どのようなストラテジーが働いているのか？

本稿の構成は、次のとおりである。

まず第2節では、議論の前提として、属性叙述に対立する事象叙述にかかわる名詞ならびに動詞の主要な文法特徴について略述する。第3節では、コリヤーク語の属性叙述形式が、伝統的なコリヤーク語文法記述と類型論において、「形容詞」の枠組みの中でどのように扱われてきたかを検証し、その主張と問題点を整理する。第4節では日本語の属性叙述判定に用いられる基準を参考に、コリヤーク語の属性叙述を意味の側面から客観的に判定する。第5節では、事象叙述文が属性叙述化する際の統語的操作と主題化のメカニズム、属性叙述文が事象叙述化する際の形態的、意味的特徴、さらには、属性叙述と事象叙述の相互変換の背後にあるストラテジーについて考察を加える。さらに、第6節の「おわりに」では、本稿の総括をおこなうとともに、従来の叙述類型論では扱われていないオーストラリアのワルング語(Warrungu, パマ・ニュンガン語族)を例にあげ、コリヤーク語の属性叙述と比較することにより、属性叙述を通言語的に捉えた場合、その具現化にどのような特徴の幅が見られるかよりマクロな視点から問題提起し、今後の叙述類型論の展開のひとつの方向性を示唆したい。

2. 事象叙述文の文法特徴

本節では、コリヤーク語の事象叙述文に関し、その基本的な文法特徴として動詞の屈折と名詞項の格標示について概観する。これにより属性叙述文がどのような点で事象叙述文と異なり、どのような点で共通しているのかを理解することが可能になる。

なおこれに先立ち、下の2.1.-2.3.では触れられないコリヤーク語のごく基本的な形態的特徴をあげておく。コリヤーク語は、接尾辞、接頭辞、接周辞²、抱合、重複などにより語形成をおこなう膠着的な言語である。特に接尾辞は屈折、派生の両面において重要な役割を果たす。抱合も重要な類型論的特徴として知られている(Kurebito 2001)。語は接辞や抱合などの手段を組み合わせで作られるが、その結果、多くの形態素を含みうる。したがって、コリヤーク語は複統合的な言語であるといえる。

²「接周辞 (circumfix)」とは、語幹の前後についてひとまとまりでひとつの意味・機能を表わす接辞を指す。コリヤーク語では動詞の屈折や派生、名詞の格などを表わすのに用いられる。

名詞の文法範疇としては、数、格、人称、さらに有生性がある。数には単数、双数、複数があり、これらは通常、絶対格においてのみ区別される（たとえば、「頭」は *lewət* [絶単] - *lewət* [絶双] - *lewtu* [絶複]）。ただし、有生の名詞は、絶対格で単数、双数、複数が区別されるだけでなく、斜格においても単数（*-ne/-na³*）と複数（*-jək*）が区別される（たとえば、*an'a-na-ŋ* 「おばあさんに」 - *an'a-jək-ə⁴-ŋ* 「おばあさんたちに」）。

格には、絶対格（*-n~-Ø~* 重複 *~ŋe/-ŋa*）、場所格（*-k/-kə*）、道具格（*-e/-a/-te/-ta*）、与格（*-ŋ*）、方向格（*-jtəŋ/-etəŋ*）、沿格（*-jpəŋ/-epəŋ/-yəpəŋ*）、奪格（*-ŋqo*）、接触格（*-jite/-eta*）、原因格（*-kjit/-kjet*）、様態格（*-u/-o/-nu/-no*）、随格（*ye/-ya-..⁵-e/-a/-te/-ta*）がある。

2.1. 動詞の屈折

事象叙述は時間の流れに沿って生起する出来事を描くため、アスペクトやテンスといった時間にかかわる文法範疇と密接に結びついている。コリヤーク語の事象叙述文における動詞屈折形式は、基本的に完了／不完了というアスペクトと未来／非未来というテンスが組み合わさってできている。また、自動詞では主語の、他動詞では主語と目的語のというように動詞の側で人称と格の標示がなされる。そのため、対応する自立の人称代名詞の出現は義務的ではない。

まず、自動詞語幹 *tawjin* 「咳き込む」の屈折形式（3 人称単数主語、直説法）を表 1 に示す⁶。

³ スラッシュを挟んで母音の異なる形式が並んでいる場合は、母音調和による異形態である（アルタイ諸言語に見られる母音調和とは異なるコリヤーク語の母音調和の詳細については、呉人 [1999] を参照されたい）。

⁴ これ以降、前後にハイフンのついたシュワは語頭・語末の 2 子音連続、語中の 3 子音連続を避けるための挿入母音、同じく前後にハイフンのついた[?]は、2 母音連続を避けるための挿入子音を指す。

⁵ 「..」は、接周辞のつく語幹部分を表している。

⁶ 伝統的なコリヤーク語文法では、動詞（直説法）の屈折形式は、下表で見ると、過去 I、過去 II、現在、未来 I、未来 II のように、テンスを基準に分類されてきた（Zhukova 1972: 229-240）。

表 Zhukova (1972) にもとづく動詞の屈折体系

過去	I	-i/-e/-j
	II	ye-/ya-..-lin/-len
現在		ku-/ko-..-ŋ
未来	I	je-/ja-..-ŋ
	II	je-/ja-...-iki/-eke/-jki/-jke

しかしながら、この分類ではいくつかの不都合が生じる。特に問題となるのが、これまで「現在形」とされてきた *ku-/ko-..-ŋ* (KU 形) である。この形式は、実際には現在のみならず過去の一時点において進行中の動作を表わすことから、この形式には、非未来というテンスと同時に不完了というアスペクトを認めるべきである。

表1 自動詞 tawjiŋ「咳き込む」の屈折形式 (3 単主, 直説法)

非未来			未来
完了	結果	完結	
	ya-tawjiŋ-len	tawjiŋ-i	ja-tawjiŋ-ə-ŋ-Ø
不完了	ku-tawjiŋ-ə-ŋ-Ø		ja-tawjiŋ-eke

この表の網掛けになっている非未来不完了相の部分, すなわち, ku-...-ŋ という接周辞からなる形式 (以下, KU 形) が属性叙述の N 形と対立する事象叙述の形式で, 過去あるいは現在に一時的に起こっている出来事や状態を表わす (語末の -Ø は, 3 人称単数主語マーカー)。このことは, KU 形が「今」や「昨日の晩」など特定の時間を指定した副詞的な要素と共起しうることからも明らかである。

- (1) a. ecyi ku-tawjiŋ-ə-ŋ-Ø
 今 不完了-咳き込む-挿入-不完了-3 単主
 「彼／彼女が今, 咳き込んでいる」
- b. ajɣəve nəki-ta ku-tawjiŋ-ə-ŋ-Ø
 昨日 晩-具 不完了-咳き込む-挿入-不完了-3 単主
 「彼／彼女が昨日の晩, 咳き込んでいた」

一方, 他動詞語幹 pŋəlo「尋ねる」の屈折形式 (3 人称単数主語・3 人称単数目的語) は下表 2 のとおりである。

表2 他動詞 pŋəlo「尋ねる」の屈折形式 (3 単主 3 単目, 直説法)

非未来			未来
完了	結果	完結	
	ya-pŋəlo-len-Ø	pəŋlo-nen-Ø-Ø	ja-pŋəlo-ŋ-nen-Ø
不完了	ko-pŋəlo-ŋ-nen-Ø		ja-pŋəlo-jk-ə-nen-Ø

網掛けの ko-pŋəlo-ŋ-nen-Ø という形式では, -nen が 3 人称単数目的語, -Ø が 3 人称単数主語を標示する。次の (2a) (2b) を見られたい。

- (2) a. ecyi ko-pŋəlo-ŋ-nen-Ø
 今 不完了-尋ねる-不完了-3 単目-3 単主
 「彼／彼女が今, (別の) 彼／彼女に尋ねている」
- b. ajɣəve nəki-ta ko-pŋəlo-ŋ-nen-Ø
 昨日 晩-具 不完了-尋ねる-不完了-3 単目-3 単主
 「彼／彼女が昨日の晩, (別の) 彼／彼女に尋ねていた」

KU形は、さらにアスペクト、使役、動作の強度を表わす接辞や抱合などにより拡張される。

- (3) ecyi ku-tawjiŋ-ə-lqiv-ə-ŋ-Ø
 今 不完了-咳込む-挿入-始動-挿入-不完了-3 単主
 「彼／彼女が今、咳き込み出している」
- (4) ku-tawjiŋ-cij-ə-ŋəvo⁷-ŋ-Ø
 不完了-咳込む-強意-挿入-習慣-不完了-3 単主
 「彼／彼女がいつもひどく咳き込んでいる」
- (5) ecyi k-ena-mal-ə-n-kemetʔa-jp-at-ə-ŋ-Ø.
 今 不完了-1単目-よく-挿入-使役-服-挿入-着る-使役-挿入-不完了-3 単主
 「彼／彼女が今、私にしっかり服を着させている」

2.2. 格標示

格標示は二重標示タイプを示し、主語・目的語といった文法関係の標示が名詞、動詞いずれの側でも明確に確立している。その意味で、コリヤーク語は Li and Thompson (1976) に従えば、主語卓越型言語といえる。

動詞の側の主語と目的語の標示は 2.1. で見たとおりであるが、名詞項の格標示は能格タイプを示す。すなわち、自動詞主語と他動詞目的語は絶対格を取るのに対し、他動詞主語は能格を取る。ただし、下表3に見るように、能格専用の標識をもつのは人称代名詞のみで、その他の名詞では有生性の階層に応じて、場所格あるいは道具格が能格標示に代用される⁸。また、場所格も道具格も取りうる名詞は、場所格の場合には定、道具格の場合には不定と区別される (呉人 2002)。

表3 コリヤーク語の能格標示に反映された名詞句階層

	能格	場所格	場所格～道具格	道具格
能格標識	-nan	-ne-k/-na-k (単), -jək-ə-k (複)	-ne-k/-na-k (単), -jək-ə-k (複)~-te/-ta	-te/-ta
名詞の種類	人称代名詞	固有名詞 疑問代名詞「誰」 親族呼称	人間名詞 指示代名詞 疑問代名詞「どの」	親族名称 動物名詞 無生物名詞

次の(6)から(9)は、有生性の違いにより、主語が異なる能格標示を受けた例である。

⁷ -ŋəvo は、「始まる、始める」を意味する自立動詞の ŋəvo がアスペクト接尾辞として文法化したものである。完了相の屈折形式と共起すると始動相を表わすが、不完了相の屈折形式と共起すると継続相を表わす。これはおそらく、「始まる、始まる」が、行為の始点のみならず始点からの継続をも含意することによると考えられる。

⁸ ただし、人称代名詞の能格マーカー -nan を有生(単数)の -na と属格の -n に分析する可能性も否定できない。

- (6) ə-nan ecyi ŋanko ku-leʔu-ŋ-nin-Ø
 彼-能 今 あそこに 不完了-見る-不完了-3単目-3単主
 əlweʔəl-Ø
 野生トナカイ-絶単
 「彼／彼女が今、野生トナカイをあそこに見ている」
- (7) ecyi qecyəlqot-na-k wal-Ø
 今 ケチゲルコット-有単-所(能) ナイフ-絶単
 ku-tejk-ə-ŋ-nin-Ø
 不完了-作る-挿入-不完了-3単目-3単主
 「今、ケチゲルコットがナイフを作っている」
- (8) ecyi elʔa-na-k ~ elʔa-ta uttəʔut
 今 女-有単-所(能) 女-具(能) 木(絶単)
 ku-cvi-tku-ŋ-nin-Ø
 不完了-切る-反復-不完了-3単目-3単主
 「今、その女～ある女が木を切っている」
- (9) ecyi ŋanko qoja-ta ku-nu-ŋ-nin-Ø
 今 あそこで トナカイ-具(能) 不完了-食べる-不完了-3単目-3単主
 pəʔo-n
 キノコ-絶単
 「今、あそこでトナカイがキノコを食べている」

2.3. 逆受動化

能格タイプのコリヤーク語は、他動詞文では通常、絶対格を取る目的語に焦点があてられ、能格を取る主語は背景化するが、目的語から主語への焦点移動をおこなうための逆受動化現象が見られる。逆受動化は、動詞の側では *ine-/ena-*、*-tku/-tko* などの逆受動化接辞、他動詞の意味を担う語彙的接辞 (呉人 2001)、目的語抱合、異根自動詞などによって実現される。また、名詞の側では、通常他動詞文では、他動詞主語が能格から絶対格に昇格することにより焦点化するのに対し、目的語は削除、斜格への降格、他動詞語幹への抱合のいずれかによって背景化する。この際、動詞は自動詞活用する。後述するように、逆受動化は事象叙述文の属性叙述化にも深く関わっている。

次の (10) は、上述の他動詞文 (6) が逆受動化した文である。(10a) では逆受動化接頭辞 *ine-* により逆受動化し、かつ主語が絶対格に昇格しているのに対し、目的語は削除されている。(10b) では目的語が動詞に抱合されることによって逆受動化している。抱合により、本来の「野生トナカイ」の意味は失われ、「野生動物一般」の意味になることに注意されたい。個別から一般というこのような意味の変化も、背景化の表れとしてとらえることができよう。

- (10) a. ənno ecyi ŋanko k-ine-leʃu-ŋ-Ø
 彼／彼女(絶単) 今 あそこに 不完了-逆受動-見る-不完了-3単主
 「今、彼／彼女があそこに(何かを)見ている」
- b. ənno ecyi ŋanko ku-we-leʃu-ŋ-Ø
 彼／彼女(絶単) 今 あそこに 不完了-野生トナカイ-見る-不完了-3単主
 「今、彼／彼女があそこに野生動物を見ている」

一方、自立動詞に対応する他動詞の概念を表わす語彙的接辞がある場合には、抱合は起こらず、語彙的接辞によって逆受動化がおこなわれる。(11)は(7)に対する逆受動文である。ここでは、自立他動詞 *tejk*「作る」ではなく、同様の意味を表わす語彙的接周辞 *ta-..-ŋ* が名詞語幹に付加されることにより、逆受動化している。この場合にも、抱合された名詞語幹 *wala*「ナイフ」はある特定のナイフを指すのではなく、ナイフ一般を指す(日本語の「ナイフ作りをする」に相当)。

- (11) *ecyi qecyəlqot-Ø ko-ta-wala-ŋ-ə-ŋ-Ø*
 今 ケチゲルコット-絶単 不完了-作る-ナイフ-作る-挿入-不完了-3単主
 「今、ケチゲルコットはナイフ作りをしている」

次の(12)は、(8)に対応する。他動詞語幹 *cvi*「切る」に目的語の *utt*「木」が抱合されることにより逆受動化している例である。

- (12) *ecyi elʃa-Ø k-utt-ə-cvi-tku-ŋ-Ø*
 今 女-絶単 不完了-木-挿入-切る-反復-不完了-3単主
 「今、女が木を切っている」

次の(13)は(9)に対応する。他動詞 *nu*「食べる」に対応する異根自動詞 *ewji*により、逆受動化が起きている例である。目的語は道具格で現れていることに注目されたい。

- (13) *ecyi ŋanko qoja-ŋa k-ewji-ŋ-Ø poʃona-ta*
 今 あそこで トナカイ-絶単 不完了-食べる-不完了-3単主 キノコ-具
 「今、あそこでトナカイがキノコ食いしている」

3. 先行研究におけるN形の扱い

本節では、第1節で属性叙述機能を持つとして言及したN形が、これまで先行研究でどのように扱われてきたかを、伝統的なコリヤーク語文法記述と類型論の両面から概観し、その主張と問題点を検証する。

3.1. 伝統的文法記述におけるN形

コリヤーク語の包括的な文法記述は、Zhukova (1972) をおいて他に見られ

ないため、これを取り上げ、検討を加える⁹。Zhukova (1972) では、次の (14) に見るように、N 形は「質形容詞」として扱われ、「関係形容詞 (otnositel'nye prilagatel'nye)」の3つの形式と区別されている¹⁰。また、対象の恒常的な特徴や性質を表わし、述語としても名詞修飾語としても用いられるとされている¹¹。このような N 形の定義づけは、たしかに、意味的にも文法機能的にも形容詞の一般的な定義にあてはまるように思われる (亀井他編著 (1996: 350–351), Brown et al. (eds.) (2006: 60–63) を参照)。

なお、(14) であげるのは、いずれも述語として用いられる場合に、3人称単数主語を表わす形式である。

(14) a. 質形容詞

n--qin/-qen (N 形) :

nətuqin 「新しい」, nəmejəŋqin 「大きい」, nəmuqeqin 「雨がちだ」,
newjiqin 「健啖家だ」....

b. 関係形容詞

ye-/ya--lin/-len (以下, GE 形) :

yeceyelin 「砂が多い」, yejewjewlin 「雷鳥が多い」, yawəwəwəlen 「石だらけだ」, yaqlavolen 「夫がいる」....

-kin/-ken (以下, KIN 形) :

nejejejin 「秋のだ」, Cajbuqaken 「チャイブハ(地名)のだ」, janotken 「先頭のだ」, pəkijkin 「到着のだ」....

⁹ 査読者から、Zhukova (1972) についての検討と本稿で扱っている属性叙述の観点にずれがあること、Zhukova (1972) が N 形について、「質形容詞」としながらも属性叙述に近い意味特徴をあげていることが十分に評価されていないという指摘をいただいた。そこで、この 3.1. では、それでもなぜ N 形を「質形容詞」でなく「属性叙述」とみなさなければならないのかという観点から、Zhukova (1972) を再検討するように努めた。また、同様に定義の曖昧さについて指摘のあった「形容詞語根」についても、「形容詞語幹」に改め、語幹のレベルで他の品詞と区別されうることを客観的な形態的基準を用いて示した。

¹⁰ ちなみに、かつてはコリヤーク語の1方言とされていたが、現在はコリヤーク語と同系の独立の言語と認められているアリュートル語 (Alutor) について、Kibrik et al. (2004) は、この分類をさらに細分化し、N 形を「質形容詞 (qualitative adjectives)」, GE 形を「存在形容詞 (habitative adjectives)」, KIN 形を「関係形容詞 (relative adjectives)」, IN 形を「所有形容詞 (possessive adjectives)」としている。一方、Dunn (1999) は、同系のチュクチ語について N 形のみを adjective とし、KIN 形を relational modifier (noun), IN 形を possessive modifier (noun) としている点、ロシア人研究者とは分類基準が異なることがうかがわれる。ただし、GE 形の名詞修飾機能については言及していない。

¹¹ Zhukova (1972) は言及していないが、述語機能と名詞修飾機能を併せ持つ形式には、他にも次のようなものがある (呉人 2009)。

1) -lʷən (yekeŋəŋlʷən 「權に乗った」, wan'avatəŋlʷən 「話をしている」, ŋujʷlʷən 「弱い」, javalʷən 「後ろにいる」など)

2) いずれにも該当しない形式 (mitʷajin 「美しい」, qewwajin 「悪い」, luqin 「黒い」, ŋənvəq 「多い」, ʃatkeŋ 「悪い」など)

1) は、従来、「行為者名詞 (imja dejatelja)」(Zhukova 1972: 137) と呼ばれ名詞の一部として扱われてきたものである。一方、2) は、従来の分類のいずれにも該当しない雑多な形式を含み、その形態的ふるまいも一様ではないが、同じく上記の2つの文法機能を兼備している。

-in/-en (以下, IN 形) :

en'picin 「父のだ」, ənpəqlavolen 「老人のだ」, qojen 「トナカイのだ」,
pəlwənten 「鉄のだ」

形容詞をこのように「質形容詞」と「関係形容詞」に二分するやり方の是非ならびにそれぞれの形式の形態的・意味的特徴については呉人 (2009) で検討されているため、ここではその詳細には立ち入ることはせず、N 形に関する Zhukova の記述に絞って検討していく。Zhukova (1972) は N 形を上述のように「質形容詞」としたうえで、これが名詞、副詞、動詞語幹から形成されているとして、次の (15) (16) (17) のような例をあげている。なお、名詞、副詞、動詞のいずれの語幹であるかは、次のように判定されている。すなわち、語幹がそのまま絶対格単数形 (-n~Ø~重複 ~-ŋe/-ŋa) を取ることができれば名詞、語幹がそのまま動詞を修飾できれば副詞、語幹がそのまま不定形の -k/-kkə を取ることができれば動詞である。

(15) 名詞語幹から形成される N 形

n-ə-qejaly-ə-qen 「寒い」	←	qejaly-ə-n 「凍寒」	
n-ə-caca-qen 「美味しい」	←	caca-n 「味」	
n-ə-ktey-qen 「風が強い」	←	kətey-Ø 「風」	
n-ə-pijkəl-qin 「蒸し暑い」	←	pijkəl-Ø 「蒸し暑さ」	
n-ə-ŋikəl-qen 「恥ずかしがりだ」	←	ŋikəl-Ø 「恥」	
n-ə-muqe-qin 「雨がちだ」	←	muqe-muq 「雨」	
n-ə-jəŋa-qin 「霧がちだ」	←	jəŋa-jəŋ 「霧」	
n-ə-tyəl-qin 「暑い」	←	yəl-yəl 「暑さ」 ¹²	(他 8 例)

(16) 副詞語幹から形成される N 形

n-ə-manəŋ-qen 「まばらだ」	←	manəŋ 「まばらに」	
n-inʔe-qin 「早い」	←	inʔe 「早く」	
n-ə-teʔi-qin 「少しだ」	←	teʔi 「少し」	
n-ə-juleq-qin 「(時間的に) 長い」	←	juleq 「(時間的に) 長く」	
n-ə-janʔaw-qen 「正確だ」	←	janʔaw 「正確に」	
n-ə-winʔv-ə-qin 「秘密だ」	←	winʔve 「秘密に」	(他 0 例)

(17) 動詞語幹から形成される N 形

n-ə-jiŋe-qin 「飛ぶ」	←	jiŋe-k 「飛ぶ」	
n-ə-palomtel-qen 「注意深い」	←	palomtel-ə-k 「注意深く聞く」	
n-ə-ʔaqatke-qen 「臭い」	←	ʔaqatke-k 「臭いにおいがする」	
n-ə-wanʔawcej-qen 「おしゃべりだ」	←	wanʔawcej-ə-k 「おしゃべりする」	
n-ə-nu-qin 「食べられる」	←	ju-kkə 「食べる」	
n-ə-java-qen 「使える」	←	java-k 「使う」	
n-ə-joʔ-ə-qen 「得られる」	←	joʔ-ə-k 「得る」	(他 58 例)

¹² yəlyəl は重複によって作られた絶対格単数形であるが、重複に際して語幹初頭の t は脱落する。

各例の右下の数字を見れば明らかなように、あげられている語例のなかで最も多いのは、動詞語幹から派生されるN形である。筆者の調査でも、動詞語幹からはきわめて生産的にN形が形成されることが確認されている。そこで、まず考えてみなければならないのは、N形は形容詞とされながらも、実際にはそれ以外の品詞、なかでも動詞からの形成を自由に許容しているという事実である。

一方、これとは対照的に、肝心の形容詞語幹については、「質形容詞の中核部」(Zhukova 1972: 146)であるとしながらも、数が非常に限られているとして、*nəmejəŋqin*「大きい」、*nətuŋqin*「若い」、*nəketyuŋqin*「強い」、*nənpəŋqin*「年老いた」の4語があげられているのみである。

しかし、形容詞語幹は実際には決して数が少ないわけではない。ちなみに、筆者は、コリヤーク語の基礎語彙1000語が収録されたKurebito (ed.) (2001) や聞き取り調査などにもとづき、これまで50あまりの形容詞語幹を確認している。これらの語幹の抽出にあたっては、N形のうち、絶対格単数形を取る名詞語幹、そのままの形で動詞を修飾できる副詞語幹、そのままの形で不定形の接尾辞 *-k/-kkə* を取ることができる動詞語幹を排除した残りの語幹を形容詞語幹とした。さらに、確認のために、それらの語幹が名詞に抱合されて、その名詞を修飾できるかどうかについてもテストした(たとえば、*mejŋ* は、名詞、副詞、動詞のいずれとも派生関係を持たず、かつ、*mejŋ-ə-wejem*「大きい川」のように名詞を修飾することから、形容詞語幹と認められる)。

(18) では現時点で確認されている形容詞語幹をあげるが、その際、それらの意味特徴の理解のために、Dixon (2004) の提示した意味タイプの分類にしたがう。Dixon (2004) は世界の諸言語の形容詞の意味タイプを調査することにより、大・中・小いずれのサイズの形容詞クラスにも認められる中核的意味タイプとして、1) DIMENSION (サイズ・容量)、2) AGE (年齢)、3) VALUE (価値)、4) COLOUR (色彩) をあげている¹³。このような中核的意味タイプ以外に、大・中サイズの形容詞クラスにのみ認められる周辺的な意味タイプとして、5) PHYSICAL PROPERTY (物理的特徴)、6) HUMAN PROPENSITY (人間的性癖)、7) SPEED (速度)、さらには、大のサイズの形容詞クラスにのみ認められるより周辺的なタイプとして、8) DIFFICULTY (難度)、9) SIMILARITY (類似性)、10) QUALIFICATION (適正評価)、11) POSITION (位置)、12) CARDINAL NUMBERS (基数) をあげている。

¹³ 一方、Givón (2001) は、時間的安定性の有無により、形容詞をプロトタイプの形容詞と非プロトタイプの形容詞に分類している。それによれば、プロトタイプの形容詞には時間的安定性の高い属性、言い換えれば、恒常的な属性を表わすサイズ、色彩、聴覚的印象、形状、味覚、触覚などの形容詞が含まれる。これに対し、非プロトタイプの形容詞には評価、一時的状態、生存状態などの形容詞が含まれる。この分類ではDixon (2004) のそれと一致するものもあれば、一致しないものもある。Givónの時間的安定性を基準として抽出されたプロトタイプの形容詞と、Dixonの実際の言語データから割り出された経験的なプロトタイプの形容詞にどのような相関性があるのかについては、今後の考察の課題としたい。

コリヤーク語で確認されている形容詞語幹は、中核的意味タイプの1) から4)、周边的意味タイプの5) と6) の意味タイプに属するものがほとんどであり、より周边的な意味タイプのものはひとつも確認されていない。このことから、形容詞語幹の多くは中核的意味タイプ、あるいは周边的意味タイプの物理的特徴や人間的性癖に集中していることがうかがえる。なかでも、物理的特徴や人間的性癖の意味タイプに多くの形容詞語幹が含まれることは興味深い。なお、形容詞語幹から作られたN形をあげた次の(18)では、語幹部分を太字で示すことにする(すべて3人称単数主語の形式)。

(18) 形容詞語幹から作られたN形

中核的意味タイプ

1) DIMENSION (サイズ・容量)

n-ə-**mejəŋ**-qin 「大きい」, n-ə-**əppl'u**-qin 「小さい」, n-ə-**qi**-qin 「厚い」,
n-ə-**vəl'y**-ə-qen 「薄い」, n-**iwl**-ə-qin 「長い」, n-**ikm**-ə-qin 「短い」,
n-**iwt**-ə-qin 「低い」, n-ə-**weŋ**-qin 「幅広い」, n-ə-**kjo**-qin 「広い」,
n-ə-**ʃum**-qin 「太い」, n-ə-**qv**-ə-qin 「狭い」, n-**əm**-qen 「深い(鍋などが)」,
n-**onm**-ə-qen 「深い(穴など)」, n-ə-**cem**-qen 「浅い」, n-ə-**mk**-ə-qin 「多い」

2) AGE (年齢)

n-ə-**tuj**-qin 「若い」, n-**ənp**-ə-qin 「年寄りだ」

3) VALUE (価値)

n-ə-**mel**-qin 「よい」, n-**ejinm**-ə-qin 「面白いい」

4) COLOUR (色彩)¹⁴

n-**ily**-ə-qin 「白い」, n-ə-**cc**-ə-qin 「赤い」

周边的意味タイプ

5) PHYSICAL PROPERTY (物理的特徴)

n-ə-**ketyu**-qin 「強い」, n-ə-**ŋuj**-qin 「弱い」, n-**icc**-ə-qin 「重い」,
n-ə-**mijqu**-qin 「軽い」, n-ə-**kt**-ə-qin 「硬い」, n-ə-**jjjk**-ə-qin 「柔らかい」,
n-**iciv**-ə-qin 「鋭い」, n-**avəl'q**-ə-qin 「鈍い」, n-ə-**mja**-qin 「苦い」,
n-ə-**ml'**-ə-qin 「細かい」, n-**im**-qin 「濃い」, n-**il'**-ə-qin 「生だ」,
n-**iy**-ə-qin 「涼しい」, n-ə-**kəcvi**-qin 「新鮮だ」, n-**il'**-ə-qin 「湿っている」,
n-ə-**wəl'q**-ə-qin 「しなやかだ」

6) HUMAN PROPENSITY (人間的性癖)

n-ə-**mit**-qin 「賢い」, n-**elejti**-qin 「無能だ」, n-**untəm**-qin 「落ち着きがある」,
n-ə-**kim**-ə-qin 「愚鈍だ」, n-ə-**jjf**-ə-qin 「嬉しがりだ」,

¹⁴ただし、同じく色彩を表わす語の中にはN形を取らないものもある。例えば, luqin 「黒い」, ceqen 「灰色」などである。これらの語の後半部分(-qin/-qen)はN形の後半とも同じであるが、前半部分(n-)がないため同一視できない。ちなみに、Zhukova (1972)によれば、これらは本来トナカイの毛色を表わす語に由来するというのである。

n-ə-pawciŋ-ə-qen 「心配性だ」, n-ə-vejulf-ə-qin 「怖がりだ」,
 n-ə-pawjaq-ə-qen 「寂がりだ」, n-ə-jejeweci-qin 「残念がりだ」,
 n-ə-ŋəcwən-qin 「悔しがりだ」, n-ə-ɣajm-ə-qen 「欲しがりだ」,
 n-uwtaŋ-qen 「几帳面だ」, n-ə-tyəm-qin 「積極的だ」,
 n-ə-tyip-qin 「用心深い」, n-ə-kacyəva-qen 「貧しい」,
 n-ə-ŋot-qen 「怒りんぼうだ」, n-ə-cijməŋ-qin 「気難しい」,
 n-ə-kaplal-qen 「凶暴だ」

7) SPEED (速度)

n-ə-jq-ə-qin 「速い」, n-ə-məll'o-qin 「敏速だ」

ちなみに、これらの形容詞語幹は、上述の N 形、GE 形、KIN 形、IN 形のうち、N 形でしか現れない。このことから、N 形が最も形容詞らしい形容詞であると考えられそうではある。とはいえ、上述のように N 形は他の品詞、とりわけ動詞語幹による形成を自由に許容しているという事実を等閑視することはできない。

3.2. 類型論における N 形

伝統的な文法記述の中で、N 形が形容詞に分類されながらも、そこにしっかりと収まりきれない特徴も見せてきたことは、類型論的な N 形の扱いにも反映している。すなわち、N 形をコリヤーク語の伝統的な記述にしたがい、「形容詞」としたうえで、動詞的な形容詞とみるか名詞的な形容詞とみるかで見解が対立してきたのである。

形容詞が品詞としての自立性に乏しく、動詞あるいは名詞の下位分類である言語も多いことはしばしば指摘されているとおりである。Stassen (2005) により北東シベリアの言語を見ると、そこには、動詞的形容詞述語を持つ言語と非動詞的 (= 名詞的) 形容詞述語を持つ言語が混在している。すなわち、ユカギール語やニヅフ語などの形容詞は動詞的性格を示す一方で、ツングース系諸言語の形容詞は名詞的性格を示す。そのなかにあつて、コリヤーク語が属するチュクチ・カムチャツカ語族の形容詞については、これを動詞的とする見解 (松本 2007) と逆に非動詞的とする見解 (Stassen 1997) が拮抗しており、その位置づけが定まっていない。

松本 (2007) と Stassen (1997) が考察の対象としているのは、コリヤーク語ではなく同系のチュクチ語であるが、両言語は「チュクチ語とコリヤーク語は言語的観点からみれば、1つの言語の2つの方言とみなしてもよいほどであるが、民族的に明確に区別できるので、2つの言語とされている」(箕浦 1989: 930) とも言われているように、相互に非常に近い関係にある。N 形も基本的には同様のふるまいを示す。したがって、ここでは混乱を避けるために必要な場合以外は、チュクチ語をコリヤーク語と置き換えて議論を進めることにする。

まず、松本 (2007) によれば、世界の言語の形容詞は大きく体言型と用言型に分類されるという。体言型はアフリカ北部からユーラシア内陸部のほぼ全域、さらに

オーストラリアに分布する。一方、用言型はアメリカ大陸のほぼ全域と旧大陸はチュクチ・カムチャツカ半島から朝鮮半島北部、さらに中国から西はインドのアッサム地方まで、また南はオーストロネシアまで分布する¹⁵。松本のこの分類にしたがうならば、シベリア極東のカムチャツカ半島を中心に分布するコリヤーク語は、用言型に属することになる。

松本がこのような見解を示しているのは、チュクチ語でN形が動詞の屈折体系に組み込まれていることによると推測される。下表4はチュクチ語の動詞jet「来る」の屈折形式をNedjalkov (1994) にもとづき示したものであるが、網掛けの非未来完了相（発話時点との関係性なし）を表わす部分が、ny-jet-qinとN形で現れていることに注目されたい¹⁶。一方、コリヤーク語ではN形は形容詞としか位置づけられておらず、動詞の屈折体系にはあげられていない (Zhukova 1972)¹⁷。ただし、両言語のN形のふるまいは基本的には同じであるため、この扱いの違いはN形そのものの違いではなく、記述方針の違いととらえるべきである。

表4 チュクチ語自動詞jet「来る」の直説法（3人称単数主語）の屈折形式 (Nedjalkov [1994: 281] に基づき作成)

	非未来		未来
	発話時点との関係性なし	発話時点との関係性あり	
完了	ge-jet-lin	ø-jet-gʔi	re-jet-gʔe
不完了	ny-jet-qin	ø-yety-rkyn	re-jety-rkyn

例(19)はコリヤーク語の形容詞語幹mejŋ「大きい」と自動詞語幹ewji「食べる」から形成されたN形のパラダイムであるが、いずれのN形もまったく同じ語形変化をすることに注目されたい。

(19) 形容詞	自動詞
1 単主 n-ə-mejŋ-ə-jyom 「私は大きい」	n-ewji-jyom 「私はよく食べる」
1 双主 n-ə-mejŋ-ə-muji 「私達2人は大きい」	n-ewji-muji 「私達2人はよく食べる」
1 複主 n-ə-mejŋ-ə-muju 「私達は大きい」	n-ewji-muju 「私達はよく食べる」
2 単主 n-ə-mejŋ-ə-jye 「君は大きい」	n-ewji-jye 「君はよく食べる」
2 双主 n-ə-mejŋ-ə-tuji 「君達2人は大きい」	n-ewji-tuji 「君達2人はよく食べる」
2 複主 n-ə-mejŋ-ə-muju 「君達は大きい」	n-ewji-muju 「君達はよく食べる」
3 単主 n-ə-mejŋ-qin-Ø 「彼は大きい」	n-ewji-qin-Ø 「彼はよく食べる」

¹⁵ 形容詞の体言型・用言型という2つのタイプの分布については、松本(2007: 194)の分布図を参照されたい。

¹⁶ Nedjalkov(1994: 281)の表では、直説法のみならず命令法、仮定法のパラダイムも示されているが、非直説法は本稿の議論には直接かかわらないため、ここでは直説法のみをあげている。

¹⁷ Comrie(1985)は、この動詞の不完了相を表わす屈折形式としてのN形がコリヤーク語(チャヴチュヴァン方言)には見られないとしているが、動詞語幹からもN形はきわめて生産的に作られることはすでに述べたとおりである。

- 3 双主 n-ə-mejəŋ-qine-t 「彼ら 2 人は大きい」 n-ewji-qine-t 「彼ら 2 人はよく食べる」
 3 複主 n-ə-mejəŋ-qine-w 「彼らは大きい」 n-ewji-qine-w 「彼らはよく食べる」

一方, Stassen (1997) は, N 形形容詞述語は動詞としてコード化されているにもかかわらず, 形態的には名詞述語同様に屈折することから, これを非動詞的 (= 名詞的) であるとしている。

たしかに, N 形の語末形式は, 名詞述語のそれと同じである。次例 (20) の, 名詞語幹 en'pici 「父」による述語の例と, 形容詞語幹 mejj 「大きい」による述語のパラダイムを比較されたい。ちなみに, Stassen (1997) は, n- を名詞化接頭辞としている。

(20) 形容詞	名詞
1 単主 n-ə-mejŋ-ə-jyəm 「私は大きい」	en'pici-jyəm 「私は父親だ」
1 双主 n-ə-mejŋ-ə-muji 「私達 2 人は大きい」	en'pici-muji 「私達 2 人は父親だ」
1 複主 n-ə-mejŋ-ə-muju 「私達は大きい」	en'pici-muju 「私達は父親だ」
2 単主 n-ə-mejŋ-ə-jye 「君は大きい」	en'pici-jyi 「あなたは父親だ」
2 双主 n-ə-mejŋ-ə-tuji 「君達 2 人は大きい」	en'pici-tuji 「あなた達 2 人は父親だ」
2 複主 n-ə-mejŋ-ə-muju 「君達は大きい」	en'pici-muju 「あなた達は父親だ」
3 単主 n-ə-mejəŋ-qin-Ø 「彼は大きい」	en'pic-Ø 「彼は父親だ」
3 双主 n-ə-mejəŋ-qine-t 「彼ら 2 人は大きい」	en'pici-t 「彼ら 2 人は父親だ」
3 複主 n-ə-mejəŋ-qine-w 「彼らは大きい」	en'pici-w 「彼らは父親だ」

以上見たように, N 形は動詞の屈折体系に組み込まれる一方で, 名詞述語に類似した屈折形式を持つために, 類型論的に動詞的タイプであるとする見解 (松本 2007) と反対に非動詞的タイプであるとする見解 (Stassen 1997) が生まれたと考えられる。このように一見, 相反する二面性を持つ N 形を正しく捉えるためには, 伝統的な形容詞という枠組みを取り払い, 品詞を超えた別の枠組みを設定する必要があると考える。

4. 属性叙述と N 形

4.1. 日本語叙述研究における属性叙述

第 3 節では, 伝統的なコリヤーク語文法記述と類型論での議論の検討から, N 形には形容詞というひとつの品詞の中では捉えられない特徴があることが明らかになった。その特徴を説明するのに有効であると考えられるのが, 「属性叙述」という叙述類型の概念である。

先にも触れたように, 「属性叙述」は, 日本語の叙述研究のなかで提示された「事象叙述」に対立する類型概念である。叙述類型に関する国内の研究史については岩男 (2008) に詳しいので, ここでは要点のみをごくかいつまんでまとめておくにとどめる。日本語において時間の流れに沿って起きる一時的な出来事を叙述する文と

時間の流れを超越した対象の属性を叙述する文を区別する必要性を初めて指摘したのは、佐久間（1941）であるとされている。佐久間（1941）は「物語り文」と「品さだめ文」という2種類の叙述の様式を提示し、前者は「事件の成行を述べる」機能、後者は「物事の性質や状態を述べたり、判断をいいあらはしたりする」機能を持つとしている（佐久間 1941: 153）。

佐久間（1941）は、さらに、この2種類の文の違いがこのような意味の違いだけでなく、無題文の「～ガ～スル（シタ）」と有題文の「～ハ～ダ」という文構造の違いとしても現れていること、物語り文には基本的に動詞が用いられ、時や場所の限定（時所的限定）を必要とすることを指摘している。佐久間の研究は、さらに三上（1953）に引き継がれたが、三上は、佐久間の物語り文と品さだめ文にそれぞれ対応するものとして「動詞文」と「名詞文」を提示し、さらに名詞文を「形容詞文」と「準詞文」（＝名詞述語文）に分類した。ここでも時所的限定や主題への着目は継承されている。

これらの研究の流れを受け、叙述の類型として事象叙述に対する属性叙述を明確に打ち出したのが、益岡（1987）である。益岡（1987）は、属性叙述を内在的属性叙述と非内在的属性叙述、事象叙述を静的な事象叙述と動的な事象叙述に下位分類するとともに、両類型の中間型を設定し、叙述類型分類の精緻化をはかっている。さらに、属性叙述の有題性の問題についても佐久間（1941）らを継承している。益岡の有題性についての基本的な見解は、次の文章に明確に述べられている。

属性叙述は対象が有する属性を述べるものであり、その点で対象の存在を志向するという特徴を持つ。そのため構造的には、対象を表示する部分と属性を表示する部分という2つの部分で構成されることになる。…（中略）…この点に対応して、文のレベルでは…（中略）…「主題（対象表示部分）＋解説（属性表示部分）」という有題文の形で表される。（益岡 2008: 4）

さらに、益岡（2004）は、属性叙述文における主題とは、文の内部的事情による所与のもので、「文内主題」とも呼ぶべきものであり、事象叙述文で談話・テキストという文外部の要請により派生的に付与される主題（すなわち、「談話・テキスト主題」）とは区別されるとしている。

日本語の叙述類型論研究を、通言語的なレベルにまで持ち上げ、さまざまな言語のさまざまな現象において形態構造、統語構造に具現化するより明確な形として、属性叙述を示してみせたのは、影山の一連の研究（影山 2004, 2006, 2008, 2009, Kageyama 2006）である。影山がユニークなのは、諸言語にみられる、事象叙述文の一般的構造制約には違反しているにもかかわらず、容認されるさまざまな言語現象に着目し、それらに共通する属性叙述機能を看破するとともに、「出来事項（event variable, event argument）」（影山 2009: 24）という抽象的な項概念を導入し、出来事項の抑制による階層構造の消滅という理論的枠組みで、属性叙述における主題取り立て現象の説明をおこなっている点である。影山（2009）のこのような知見が、コリヤーク語の属性叙述文についても適合することについては、5.1. で詳述する。

4.2. N形の属性叙述機能の判定

次に、日本語の属性叙述の判定基準を参考に、N形が属性叙述機能を担っていることを論証する¹⁸。

属性叙述では、対象の時間を超越した恒常的属性が描写される。そのため、時間的な指定とはなじまないことが予想される。これについては、すでに佐久間(1941)によって指摘されている。佐久間(1941)によれば、事象を描く際には時や場所の限定、すなわち時所的限定が必要である。事象叙述は、特定の時空間に実現するという性格からテンスやアスペクトという時間性や空間性が関与すると考えられるからである。一方、属性叙述は時間の流れを超越した恒常的な属性を叙述するために、特定の時間や空間的限定を表わす副詞的表現とは適合しないという性格を持っているということになる。

影山(2008)では、このうち時間的限定に着目し、これを内的属性叙述と準属性叙述という下位分類に対応する形で精緻化したチャートを提案しているが、ここではまず佐久間(1941)に立ち戻って、時間と場所それぞれの限定からN形をみしてみる。

まず、時間的限定についてみると、日本語同様、N形は時間を指定する副詞的要素とは適合しない。ここでは、形容詞語幹 *ɲot*「怒った」(21)、名詞語幹 *ɲikəl*「恥」(22)、副詞語幹 *manaj*「まばらに」(23)、自動詞語幹 *ewji*「食べる」(24)というすべての品詞について、KU形とN形が *ecyi*「今」という時間副詞と共起できるかどうかテストしてみる。すると、KU形は *ecyi* との共起が可能であるが、N形は不可能なことがわかる。なお、下の例でわかるように、同一語幹からKU形とN形のいずれもが生成されるが、KU形を取る場合、動詞語幹はそのままである一方、形容詞、名詞には動詞化接尾辞 *-et/-at* (以下、ET接尾辞)がつくことに注意されたい。

- (21) a. *ecyi ənno unmək ko-ɲot-at-ə-ŋ-Ø*
 今 彼/彼女(絶) とても 不完了-怒った-動詞化-挿入-不完了-3単主
 「今、彼/彼女がとても怒っている」
- b. **ecyi ənno unmək n-ə-ɲot-qen*
 今 彼/彼女(絶) とても 属性-挿入-怒った-3単主
- c. *ənno unmək n-ə-ɲot-qen*
 彼/彼女(絶) とても 属性-挿入-怒った-3単主
 「彼/彼女は(恒常的に)とても怒りっぱい」
- (22) a. *ecyi ənno ko-ɲikəl-at-ə-ŋ-Ø*
 今 彼/彼女(絶) 不完了-恥-動詞化-挿入-不完了-3単主
 「今、彼/彼女が恥ずかしがっている」

¹⁸ この4.2.の部分は、属性叙述と事象叙述の区別を客観的に判定する基準を示し、その基準が適用するかどうかを具体的に論証する必要があるとの査読者の助言により、新たに加えたものである。

- b. *ecyi ənno n-ə-ŋikəl-qen
今 彼／彼女(絶) 属性-挿入-恥-3単主
- c. ənno n-ə-ŋikəl-qen
彼／彼女(絶) 属性-挿入-恥-3単主
「彼／彼女は(恒常的に)恥ずかしがりやだ」
- (23) a. ecyi ko-manaŋ-at-ə-ŋ-Ø
今 不完了-まばらに-動詞化-挿入-不完了-3単主
「今, それがまばらである」
- b. *ecyi n-ə-manaŋ-qin
今 属性-挿入-まばらに-3単主
- c. n-ə-manaŋ-qin
属性-挿入-まばらに-3単主
「それは(恒常的に)まばらだ」
- (24) a. ecyi ənno k-ewji-ŋ-Ø
今 彼／彼女(絶) 不完了-食べる-不完了-3単主
「今, 彼／彼女が食べている」
- b. *ecyi ənno n-ewji-qin
今 彼／彼女(絶) 属性-食べる-3単主
- c. ənno n-ewji-qin
彼／彼女(絶) 属性-食べる-3単主
「彼／彼女は(恒常的に)健啖家だ」

一方、場所的限定は、必ずしもN形に適合しないわけではないようである。たとえば, jaja-k「家で」が形容詞語幹 umtəm「落ち着いている」, 自動詞語幹 wan'awcej「おしゃべりする」から作られるKU形とN形とに適合するかどうかテストしてみると, KU形ともN形ともjaja-k「家で」は共起しうることがわかる。この場合の場所的限定は対比的な意味をもつ。

- (25) a. ecyi ənno jaja-k
今 彼／彼女(絶) 家-所
k-umtəm-et-ə-ŋ-Ø
不完了-落ち着いている-動詞化-挿入-不完了-3単主
「今, 彼／彼女が家で落ち着いている」
- b. ənno jaja-k n-umtəm-qin
彼／彼女(絶) 家-所 属性-落ち着いている-3単主
「彼／彼女は家では(恒常的に)落ち着いている」
- (26) a. ecyi ənno jaja-k ko-wan'awcej-ə-ŋ-Ø
今 彼／彼女(絶) 家-所 不完了-しゃべる-挿入-不完了-3単主
「今, 彼／彼女が家でおしゃべりしている」

- b. ənno jaja-k n-ə-wan'awcej-qin
 彼／彼女(絶) 家-所 属性-挿入-しゃべる-3単主
 「彼／彼女は家では(恒常的に)おしゃべりだ」

5. 事象叙述と属性叙述の相互変換

本節では、N形属性叙述文がKU形属性叙述文と相互変換される際に、どのような統語的操作や形態的・意味的特徴が見られるのかを探っていく。上述のとおり、同じ形容詞、名詞、副詞、動詞語幹から、事象叙述と属性叙述はどちらも生成することができるが、とりわけ、事象叙述に典型的な動詞文が属性叙述化する場合、逆に属性叙述に典型的な形容詞文が事象叙述化する際に、特筆すべきいくつかの特徴が顕現する。

5.1. 事象叙述文の属性叙述化

5.1.1. 主語が属性叙述の対象となる場合

N形属性叙述文は、日本語同様、対象を表示する部分とその属性を表示する部分という2つの柱から構成される有題文という構造を持つという性質上、名詞は1項しか取ることができない(ただし、斜格名詞はそのかぎりではない)。したがって、名詞、形容詞、副詞、自動詞語幹からなるKU形がN形に変換される場合には、通常、項関係に変更はない。しかし、KU形事象叙述文において通常2項(時に3項)を要求する他動詞語幹からN形が派生されると、名詞の1項化にともない、KU形におけるどの名詞が叙述の対象になるかによって異なる統語操作が必要になってくる。

まず、動詞の側でも名詞の側でも変更のない自動詞の例からみる。KU形(27a)と対応するN形(27b)を比較されたい。

- (27) a. 【事象叙述：自動詞活用，主語＝絶対格】
 ecyi ʔojacek-Ø ku-cetkejuŋ-ə-ŋ-Ø
 今 男-絶単 不完了-考える-挿入-不完了-3単主
 「今，男が考えている」
- b. 【属性叙述：自動詞活用，主語＝絶対格】
 ʔojacek-Ø n-ə-cetkejuŋ-qin
 男-絶単 属性-挿入-考える-3単主
 「男は(恒常的に)考えている(＝思慮深い)」

一方、N形が他動詞語幹から作られ、主語の属性叙述をおこなう場合には、異なる統語操作が必要になってくる。すなわち、他動詞が逆受動化接辞、語彙的接辞、抱合、異根自動詞などによって逆受動化するとともに、主語は能格から絶対格に昇格する一方で、目的語は削除されるか、斜格を取るか、抱合されるか、あるいは語彙的接辞とむすびつく。

(28a) は他動詞語幹 anja 「ほめる」のKU形事象叙述文の例、(28b) は、anja に

逆受動化接尾辞 -cet が付加されるとともに、主語が絶対格に昇格し、目的語が与格に降格している属性叙述の例である。これに対して、(28c) は、目的語が抱合されている属性叙述の例である。

- (28) a. 【事象叙述：他動詞活用，主語＝道具〔能〕格，目的語＝絶対格】
 ecyi kəmiŋ-ə-n k-anja-ŋ-nen-Ø əllʔ-a
 今 子供-挿入-絶単 不完了-ほめる-不完了-3単目-3単主 母-具(能)
 「今，母親が子供をほめている」
- b. 【属性叙述：自動詞活用，主語＝絶対格，目的語＝与格】
 əlla-Ø n-anja-cet-qen kəmeŋ-ə-ŋ
 母-絶単 属性-ほめる-逆受動-3単主 子供-挿入-与
 「母は(自分の)子供をほめるものだ」
- c. 【属性叙述：自動詞活用，主語＝絶対格，目的語＝抱合】
 əlla-Ø n-ə-kmeŋ-ə-ʔ-anja-qen
 母-絶単 属性-挿入-子供-挿入-挿入-ほめる-3単主
 「母は(一般的な)子供をほめるものだ」

次に、語彙的接辞による逆受動化の例については、前出の(7)を再度見てみよう。(7)(=29a)のKU形では自立他動詞語幹 tejk「作る」が用いられていたが、逆受動化する場合には抱合はおこなわれずに、対応する語彙的接周辞 ta-..-ŋ が用いられていた(11)(=29b)。この形態的操作はN形に変換されるときにも援用される(29c)。

- (29) a. 【事象叙述：他動詞活用，主語＝道具〔能〕格，目的語＝絶対格】＝(7)
 ecyi qecyəlqot-na-k wala-Ø
 今 ケチゲルコット-有単-所(能) ナイフ-絶単
 ku-tejk-ə-ŋ-nen-Ø
 不完了-作る-挿入-不完了-3単目-3単主
 「今，ケチゲルコットがナイフを作っている」
- b. 【事象叙述：自動詞活用，主語＝絶対格，語彙的接辞+目的語】＝(11)
 ecyi qecyəlqot-Ø ko-ta-wala-ŋ-ə-ŋ-Ø
 今 ケチゲルコット-絶単 不完了-作る-ナイフ-作る-挿入-不完了-3単主
 「今，ケチゲルコットがナイフ作りをしている」
- c. 【属性叙述：自動詞活用，主語＝絶対格，語彙的接辞+目的語】
 qecyəlqot-Ø n-ə-ta-wala-ŋ-qen
 ケチゲルコット-絶単 属性-挿入-作る-ナイフ-作る-3単主
 「ケチゲルコットは(恒常的に)ナイフ作りをしている」

次は、前出の(9)(13)で見た異根自動詞による逆受動化が属性叙述に用いられている例である。(9)(=30a)は他動詞語幹 nu「食べる」のKU形の例、(13)(=30b)は対応する異根自動詞 ewji による逆受動化したKU形の例であった。これに対し、

(30c) が N 形である。

- (30) a. 【事象叙述：他動詞活用，主語＝道具〔能〕格，目的語＝絶対格】＝(9)
 ecyi ŋanko qoja-ta ku-nu-ŋ-nin-Ø
 今 あそこで トナカイ-具(能) 不完了-食べる-不完了-3単目-3単主
 pəŋo-n
 キノコ-絶単
 「今，あそこでトナカイがキノコを食べている」
- b. 【事象叙述：自動詞活用，主語＝絶対格，目的語＝道具格】＝(13)
 ecyi ŋanko qoja-ŋa k-ewji-ŋ-Ø pəŋona-ta
 今 あそこで トナカイ-絶単 不完了-食べる-不完了-3単主 キノコ-具
 「今，あそこでトナカイがキノコ食いしている」
- c. 【属性叙述：自動詞活用，主語＝絶対格，目的語＝道具格】
 qoja-ŋa n-ewji-qen pəŋona-ta
 トナカイ-絶単 属性-食べる-3単主 キノコ-具
 「トナカイはキノコを(恒常的に)食べるものだ」

5.1.2. 目的語が属性叙述の対象となる場合

一方，目的語が属性叙述の対象となる場合には，明らかに KU 形の一般的構造制約に違反する統語操作が観察される。すなわち，他動詞語幹がそのまま自動詞活用し，これにともない主語が削除される。ただし，残される目的語の格標示は絶対格のまま変わらない。たとえば，先にあげた (28a) (=31a) の KU 形とそれに対応する目的語が保持される N 形 (31b) を比較してみよう。

- (31) a. 【事象叙述：他動詞活用，主語＝道具〔能〕格，目的語＝絶対格】(=28a)
 ecyi kəmiŋ-ə-n k-aŋja-ŋ-nen-Ø əllŋ-a
 今 子供-挿入-絶単 不完了-ほめる-不完了-3単目-3単主 母-具(能)
 「今，母親が子供をほめている」
- b. 【属性叙述：他動詞語幹＝自動詞活用，主語＝Ø，目的語＝絶対格】
 kəmiŋ-ə-n n-aŋja-qen
 子供-挿入-絶単 属性-ほめる-3単主
 「子供はほめてやるものだ」

このような統語操作は，事象叙述文では明らかな制約違反である。このことは，N 形属性叙述文が指向している構造は，事象叙述が基盤としている項－述語という文法関係では説明できないことを示している。

5.1.3. 斜格名詞が属性叙述の対象となる場合

N 形属性叙述文が文法関係とは異なる基盤により成立していることを示すもう 1

つの例が、斜格名詞が属性叙述の対象となる場合である。すなわち、KU形では通常、斜格で現われる名詞は、N形では絶対格で現われる。次の(32a)のKU形事象叙述文では「ツンドラ」は場所格で現われているが、対応するN形属性叙述文の(32b)では絶対格に昇格していることに注意されたい。KU形で動詞に標示されている3人称単数主語は形式的(dummy)なものである。なお、この例は名詞語幹からなるN形の例であり、現在のところ、動詞語幹からなるN形の例は収集されていない。

- (32) a. ecyi nute-k ko-qejaly-at-a-ŋ-Ø
 今 ツンドラ-所 不完了-寒さ-動詞化-挿入-不完了-3単主
 「今、ツンドラでは寒い」
- b. nutenut n-a-qejaly-a-qen
 ツンドラ(絶単) 属性-挿入-寒さ-挿入-3単主
 「ツンドラは(恒常的に)寒い」

5.1.4. 主題化のための特異な統語操作

事象叙述文が属性叙述化する際に観察される以上のいくつかの現象をまとめると、次のようになる。

- (33) a. 属性叙述文は、対象を表示する部分とその属性を表示する部分という2つの柱から構成される有題文の構造をなす。したがって、N形が要求する名詞項は1つだけである。その名詞項は常に絶対格で現れ、動詞は自動詞活用する。
- b. 主題化に向けた統語操作には、名詞の文法機能によって次の3つがある。
- ①他動詞主語が属性叙述の対象となる場合には、逆受動化する。
 - ②目的語が属性叙述の対象となる場合には、他動詞語幹はそのままで自動詞活用し、主語が削除される。
 - ③斜格名詞が属性叙述の対象となる場合には、その名詞は絶対格に昇格する。

N形属性叙述文は、絶対格の1つの名詞項を取り、動詞の側でその名詞項に一致する人称標示がなされる。その点で、いわば、事象叙述文の自動詞文のような体裁を取っている。しかし、実際には、上で見たように、KU形事象叙述文の構造制約に違反しており、事象叙述文とは「似て非なる」特徴を示すのである。

コリャーク語のこの事実は、影山(2009)の、一般的に有効だとされる言語の構造制約から逸脱しているにも拘わらず容認されるさまざまな現象が、実は、共通して属性叙述機能を持つとする見解とも共通している。下では、影山(2009)があげているこれらの現象について、形態論に関わる異常現象(34)、統語論に関わる異常現象(35)、格標示に関わる異常現象(36)に分けて紹介する。なお、あげられている異常現象は多岐にわたり例も多いので、ここでは各現象それぞれ1つずつの

例を引くにとどめる。

(34) 形態論に関わる異常現象

- a. 日本語の外項複合語：
[大統領主催] のパーティ
- b. 英語やハンガリー語の形容詞的過去分詞：
a much/well/far-traveled man 「見識の高い人」

(35) 統語論に関わる異常現象

- a. 英語や日本語の異常受身文
This spoon has been eaten with. (Davison 1980)
納豆は、この地方では毎朝、子供達に食べさせられている。
- b. スペイン語の非人称再帰文
Aquí se duerme muy bien en verano
here REFL sleeps very well in summer
「夏はここがよく眠れる」
- c. ロシア語や英語などの動作主属性文
Kot dzjare-cca. Belorussian
cat scratches-REFL (Geniušienė 1987: 249)
「ネコは引っ掻くものだ」
Tigers kill only at night. (Goldberg 2001)
- d. 英語の付加詞主語文
This cabin sleeps twenty people. (Perlmutter and Postal 1984: 92)
- e. 日本語の「青い目をしている」文
あのアメリカ人は青い目をしている

(36) 格標示に関わる異常現象

- a. 能格型言語であるマニプル語の特異な格標示
tomba=naa sing-i.
Tomba=ERG intelligent-REALIS
‘Tomba is intelligent.’ (Poudel 2007)
- b. 日本語の異常な「ニ－ガ」標示
おまえなんかに、この問題を解けるもんか！

影山 (2009: 23) は、これらに共通する特徴を次のようにまとめている。

- (37) a. 本来なら事象叙述文に適用することが規範であるはずの種々の規則が、本来の構造制約に違反して適用されると属性叙述の機能が生じる。
- b. 属性叙述文になることで、元の事象叙述文と比べて他動性が下がる。

さらに、影山 (2009) は、このような属性叙述現象に共通する特徴を出来事項という抽象的な項を導入することによって説明しようとしている。すなわち、事象叙

述では機能している出来事項が不活性化すると、項構造が階層的秩序を失い、平板化する。その結果、項構造内部の名詞項だけでなく、項構造に含まれない付加詞までも主題として取り立てることが可能になる。これが、属性叙述化の統語的なメカニズムであるとするのである。

この指摘は、コリヤーク語にもあてはまる。上で見たような事象叙述文の一般構造制約に対する違反は、まさに、主語だけでなく目的語、場所名詞のような付加詞までも主題として取り立てるための方策であると考えられる。

以上のことから、コリヤーク語では、事象叙述構文と属性叙述文が成立する基盤は異なることが明らかになる。すなわち、前者は、項-述語という文法関係、後者は主題-解説という情報構造を基盤に成り立っているである。ただし、その際、属性叙述は事象叙述とは全く異なる独自の統語操作をおこなうのではなく、事象叙述文の構造制約を利用しつつも、そこに一部、違反を起こすことで属性叙述文が創出される。このことは、益岡（2008: 7）の「属性叙述と事象叙述は相互に完全に分断されているのではなく、‘通路’が開いている」との指摘にも通じる。さらに、属性叙述と事象叙述が相互に作用しながら、品詞を超え広くその機能を発揮させるためのストラテジーがその背後に存在することを示唆しているように思われる。

5.2. 属性叙述文の事象叙述化

5.1. では、事象叙述の属性叙述化のメカニズムについて考察した。そこで、次に、反対の属性叙述の事象叙述化について、属性叙述文に典型的な形容詞語幹を取り上げて考察してみる。一言で形容詞といっても、より恒常的な属性の強いもの（例：富士山は高い、アメリカは国土が広い）から、より一時的な状態性の強いもの（例：太郎は試験に落ちて悔しい、今日は雨で涼しい）まで、時間的安定性の程度は同じではない。また、ひとつの形容詞が場合によって、属性叙述をすることも事象叙述をすることもありえる。日本語（標準語）を例にとってみれば、次の（38a）（38b）のように同じ形容詞が、文脈によって属性叙述になったり事象叙述になったりすることもある。

- (38) a. 花子は美しい [属性叙述]
花子は、今日はやけに美しい [事象叙述]

一方、青森県五所川原方言、五戸方言、深浦方言、宮城県中田方言、熊本県松橋方言などには、形容詞に属性叙述とは別に事象叙述の形式があることが知られている（工藤（編）2007、八亀2008、加藤2010など）¹⁹。この形式は、人の存在を表わ

¹⁹ 英語でも文による意味の強制によって、属性述語形容詞が状態述語形容詞の意味を帯びることがあるのは、周知の事実である。

a. You have seen Max intelligent on several occasions.
b. Max is being intelligent.

(Fernald 2000: 64)

す本動詞「イダ」や「オル」の文法化によって成立している。(39) (40)は、加藤(2010)の青森県南部方言の例であるが、(39)が事象叙述、(40)が属性叙述の文である。各例のBの部分の方言形に注目されたい(なお、コリヤーク語と対応させるために、便宜的に例の順番を変えてある)。

- (39) A(外から戻ってきたばかりのBに)「今日はだいぶ冷え込んでいるらしいね」
B「スゴク寒クテラジャ」
(40) A「あの街は、冬になるとずいぶん寒いんじゃないか」
B「スゴク寒イジャ」 (加藤 2010: 136)

このように形容詞語幹に存在動詞を付加して事象叙述文を作る方法は、実は、コリヤーク語とも共通している可能性がある。なぜならば、コリヤーク語の名詞、副詞、形容詞語幹から事象叙述文を作る際に付加される上述のET接尾辞は、Zhukova(1972)によれば、「いる、ある、～の状態にある」を意味する存在動詞語幹itが文法化したものであるからである。

次の形容詞語幹jiŋ「嬉しい」のKU形事象叙述文(41a)とN形属性叙述文(41b)を比較されたい。一時的状態を表わす(41a)では、語幹にET接尾辞が付加されるが、恒常的属性を表わす(41b)では付加されない。

- (41) a. ecyi ənno ku-jiŋ-et-ə-ŋ-∅
今 彼／彼女(絶) 不完了-嬉しい-動詞化-挿入-不完了-3単主
「今、彼／彼女は嬉しがっている」
b. ənno n-ə-jiŋ-ə-qen
彼／彼女(絶) 属性-挿入-嬉しい-挿入-3単主
「彼／彼女は(恒常的に)嬉しがり屋だ」

ET接尾辞が存在動詞itに由来することが間違いないとすれば、(41a) (41b)は、青森県南部方言の(39) (40)ときれいに対応しているといえる。

ただし、コリヤーク語の場合には、形容詞語幹にET接尾辞が付加されKU形で事象叙述がおこなわれる場合、形容詞語幹自体の表わす時間的安定性の程度によって、一時的な状態と変化という異なる意味が生まれる。言い換えれば、一時的な状態という意味が強い形容詞語幹がKU形になる場合には状態の意味になるのに対し、恒常的な属性という意味の強い形容詞語幹がKU形になる場合には変化の意味になる。

まずは、「嬉しい」「悲しい」などの一時的な状態を表わす次の(42)のような感情形容詞語幹を取り上げ、これらが事象叙述化の際の特徴を観察してみたい。

- (42) jiŋ「嬉しい」、pawjaq「寂しい」、untəm「落ち着いている」、vejuŋ「怖い」、
pawciŋ「心配だ」、jejweci「残念だ」、ŋəcwən「悔しい」、ɣajm「欲しい」

これらの語幹は、そのままN形を取り、その状態が恒常的であることを意味する。

- (43) n-ə-jiŋ-ə-qin 「彼／彼女は嬉しがりやだ」
 n-ə-pawjaq-qen 「彼／彼女は寂しがりやだ」
 n-untəm-qen 「彼／彼女は落ち着きがある」
 n-ə-vejulŋ-ə-qin 「彼／彼女は怖がりだ」
 n-ə-pawciŋ-qen 「彼／彼女は心配性だ」
 n-ə-jejweci-qin 「彼／彼女は残念がりだ」
 n-ə-ŋəcwən-qin 「彼／彼女は悔しがりやだ」
 n-ə-ɣajm-ə-qen 「彼／彼女は欲しがりだ」

これに対し、これらの感情が一時的に生じている状態を表わす、すなわち事象叙述になると、語幹に ET 接尾辞が付加された KU 形になる。

- (44) ku-jiŋ-et-ə-ŋ-Ø 「彼／彼女は嬉しがっている／いた」
 ko-pawjaq-at-ə-ŋ-Ø 「彼／彼女は寂しがっている／いた」
 k-untəm-et-ə-ŋ-Ø 「彼／彼女は落ち着いている／いた」
 ku-vejulŋ-et-ə-ŋ-Ø 「彼／彼女は怖がっている／いた」
 ku-pawciŋ-at-ə-ŋ-Ø 「彼／彼女は心配している／いた」
 ku-jejwec-et-ə-ŋ-Ø 「彼／彼女は残念がっている／いた」
 ku-ŋəcwən-at-ə-ŋ-Ø 「彼／彼女は悔しがっている／いた」
 ko-ɣajm-at-ə-ŋ-Ø 「彼／彼女は欲しがっている／いた」

一方、恒常的な属性の意味合いの強い、いわゆる属性形容詞語幹も、ET 接尾辞を介して KU 形を取ることができるが、その場合には、一時的状態ではなく、その状態への変化のプロセスにあることを表わす。次の (45) の N 形と (46) の KU 形を感情形容詞の (43) の N 形と (44) の KU 形と比較されたい。

- (45) n-ə-mejŋ-qin-Ø 「彼／彼女は大きい」
 (46) ku-mejŋ-et-ə-ŋ-Ø 「彼／彼女は大きくなっている／大きくなっていた」
 *「彼／彼女は大きい／大きかった」

感情形容詞と属性形容詞は、N 形では同じく恒常的な属性を表わすのに対し、KU 形では同じ ET 接尾辞を取っているにもかかわらず、前者は一時的状態を、後者は変化のプロセスにある状態を表わすという違いが生じるのである。

このように、ET 接尾辞を介した KU 形において、変化を表わす形容詞語幹には、たとえば、次のようなものがある。

- (47) mejŋ 「大きい」, əppl'u 「小さい」, iwl 「長い」, ikm 「短い」, mel 「よい」, ily 「白い」, icc 「重い」, jijk 「柔らかい」, qv 「狭い」

次の (48) では、それぞれの語幹について、N 形は省略し KU 形のみをあげる。なお、いずれの例でも主語は 3 人称単数であるため、(46) のように「彼／彼女」

としてもよいが、それぞれの形容詞の表す意味を考慮して、「それ」に統一する。

- (48) ku-mejn-et-ə-ŋ-Ø 「それは大きくなっている／いた」
- ku-ppl'-at-ə-ŋ-Ø 「それは小さくなっている／いた」
- k-iwl-et-ə-ŋ-Ø 「それは長くなっている／いた」
- k-ikm-et-ə-ŋ-Ø 「それは短くなっている／いた」
- ku-mel-et-ə-ŋ-Ø 「それは良くなっている／いた
→天気が良くなっている／いた」
- k-ily-et-ə-ŋ-Ø 「それは白くなっている／いた
→夜が明けている／いた」
- k-icc-et-ə-ŋ-Ø 「それは重くなっている／いた」
- k-jijk-et-ə-ŋ-Ø 「それは柔らかくなっている／いた」
- ku-qv-et-ə-ŋ-Ø 「それは狭くなっている／いた」

(42) であげた感情形容詞と比べると、(47) であげた属性形容詞は恒常性が高いために、たとえば、「一時的に大きい状態にある」「一時的に狭い状態にある」という意味が表しにくい、言い換えれば、属性叙述に傾きやすいといえる。そのために、KU形で同じET接尾辞をとっても、一時的状態ではなく、変化を表すことになると考えられる。KU形で一時的な意味を表わす部分が欠落しているのはそのためであろう(図1参照)。

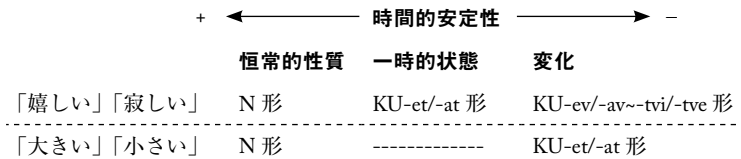


図1 時間的安定性からみた感情形容詞と属性形容詞のふるまいの違い

5.3. 時間的安定性と叙述類型

以上、コリヤーク語には品詞を超えて属性叙述と事象叙述の対立があり、その対立に沿って形容詞、動詞、名詞、副詞が形態的・統語的に類似したふるまいを示すことをみてきた。しかし、3.2.の類型論におけるN形の抜いで見たN形属性叙述文と名詞述語文との類似性については、まだ説明がなされていない。そこで、属性と事象という叙述タイプの区別が、名詞と動詞という品詞の区別とどのように相関しているのかを考えておきたい。

品詞と意味の相関性といえば想起されるのは、Givón (2001) が提案した「時間的安定性 (Time Stability)」の概念であろう。すなわち、Givón (2001) は、名詞、形容詞、動詞が「時間的安定性」という意味的基準のスケールにおいて連続相を成しており、最も時間的安定性が高い極に位置するのは名詞、反対に最も安定性が低

い極に位置するのは動詞であるとしている。一方、形容詞は両者の中間に位置し、より時間的安定性が高く名詞に近いものと、より時間的安定性が低く動詞に近いものがある。下の (49) で示すスケールによれば、green のようないわゆる「属性」をあらわす形容詞は名詞に近い位置にあり、sad のような「一時的状態」を表わす形容詞は動詞に近い位置におかれている。このような連続相で品詞を捉えるならば、時間的安定度の近い語同士が、文法的にも同様のふるまいをすることは必ずしも不思議なことではない。

(49) The scale of temporal stability (Givón 2001: 54)

most stable			least stable			
tree	green	sad	know	work	shoot	
noun	adj	adj	verb	verb	verb	

コリヤーク語においても、時間的安定性による品詞の区別は、これまで議論してきた属性叙述と事象叙述の区別とも無関係ではない。すなわち、属性叙述は恒常的属性を表すために時間的安定性が高く、したがって名詞的である。一方、事象叙述は一時的状態や出来事を表すために時間的安定性が低く、したがって動詞的である。このことから、N 形が名詞述語と類似した活用をするとしても決して不思議ではないことがわかる。ただし、さらに重要なのは、コリヤーク語では、Givón (2001) が指摘したそれぞれの語幹に内在する語彙の意味に、N 形が担う属性叙述、KU 形が担う事象叙述が被さることによって、時間的安定性の度合いにかかわらず、どの品詞でも属性叙述も事象叙述もおこないうる柔軟な仕組みになっていることである。すなわち、時間的安定性の高い名詞も低い動詞も、さらにはその中間に位置する形容詞も、N 形と結びつくことにより属性叙述が可能になる一方で、KU 形と結びつくことにより事象叙述も可能となるのである。(49) にコリヤーク語の N 形と KU 形という 2 つの叙述のタイプを位置づけて図示すると、次の (50) のようになる。

(50) 時間的安定性に関する品詞と叙述タイプの相関性

	most stable			least stable		
語彙の意味	tree	green	sad	know	work	shoot
	noun	adj	adj	verb	verb	verb
叙述タイプ	N 形 (属性叙述)			KU 形 (事象叙述)		

6. 叙述類型論の今後の展開に向けて—おわりに代えて—

本稿では、日本語の叙述研究において提唱されてきた属性叙述と事象叙述という 2 つのタイプの区別が、コリヤーク語では形態構造にも統語構造にも明確な形として具現化していることについて見てきた。まず、本稿で論証されたコリヤーク語の N 形と KU 形の相関性について総括する。

- ①コリヤーク語には、N形という形態的に明示的な属性叙述形式が存在する。この形式は、品詞の違いを超えて属性叙述機能を担う。
- ②統語的にみると、属性叙述化においては、事象叙述の構造制約に違反するいくつかの特徴がみられる。これは、文中の項や付加詞を主題化させるための統語操作であると考えられるが、影山（2009）の論じている出来事項の不活性化による項構造の平板化と同様の原理で、そのメカニズムは説明できる。
- ③N形形容詞述語の事象叙述化には、日本語諸方言同様、存在動詞が関わっていると考えられる。また、語幹のあらゆる時間的安定性の度合いにより、状態と変化という異なる意味が生まれる。
- ④N形とKU形の相互変換は、各品詞語幹が本来的にもつ時間的安定性の制限を解消するストラテジーである。

以上、本稿で明らかにされたコリヤーク語の属性叙述に関する知見により、叙述類型論に新たな展開がもたらされることが期待されるが、さらには、今後、より広範にさまざまな言語のデータを掘り起こすことにより、属性叙述が言語によって具現化される多様性の幅が連続相として見えてくる可能性もある。

ここでは、そのことを示唆する一例として、オーストラリアのワルング語を取り上げる。ワルング語は大まかにいえば、名詞が能格タイプ、代名詞が対格タイプの格標示をおこなう、分裂能格タイプの言語である。また、コリヤーク語同様、逆受動構文をもつ。ただし、この言語にはコリヤーク語のような属性叙述専用の形態的なマーカーはなく、もっぱら統語操作によって属性叙述をおこなっていると考えられる。

まず、第一に、ワルング語の逆受動構文のなかに属性叙述と考えられる例が見られる。Tsunoda (1988) によれば、これらの文は、対応する他動詞文とは異なり、習慣、性向、職業などを表わすという。この時、斜格に降格した目的語は一般的な意味を表わすが、時に削除されることもあるという。逆受動構文 (51) (52) (53) を見られたい。

- (51) Referring to a drunkard:
kamukamu+ngku nyula pitya+kali+n
 grog+INSTR 3SG+NOM drink+ANTI+P/P
 ‘He drinks grog all the time.’ (Tsunoda 1988: 603)
- (52) Referring to a chaste woman:
warrngu+∅ tyarripara+∅ wanta+kali+n [tyumpi+ngku]
 woman+ABS good+ABS leave+ANTI+P/P [penis+INSTR]
 ‘[That] chaste woman leaves [i.e. does not seek] penises.’ (Tsunoda 1988: 603)
- (53) *nyula manytya+ngku [or, manytya+wu] watyu+kali+yal*
 3SG+NOM food+INSTR food+DAT cook+ANTI+PURP
 Informant’s translation: ‘She’s a cook.’ (Tsunoda 1988: 604)

ただし、これらの文は上述のように属性叙述の明確な形態的マーカーがないこととも関連して、文脈によっては、逆受動文が表わす別の意味である進行／継続相の意味にも解釈できるとのことである（角田太作氏私信）。

次に、Tsunoda (1998) が ‘Nice to VERB’ 構文, ‘Noun is for VERBing with’ 構文と呼ぶ構文にも、属性叙述機能が認められる。これらの構文に共通するのは、対格を表わす名詞句が属性叙述の対象となり、文頭に置かれて主題化するということである。(54a) は、通常の事象叙述文, (54b) は ‘Nice to VERB’ 構文, (55a) は事象叙述文, (55b) は ‘Noun is for VERBing with’ 構文である。

- (54) a. *ngana-Ø mulkungurru-Ø jarripara-Ø muja-lku*
1PL-ERG squatter.pigeon-ACC good-ACC eat-PURP
‘We will eat nice squatter pigeons.’
- b. *mulkungurru-Ø jarripara-Ø muja-lku*
squatter.pigeon-ACC good-ACC eat-PURP
‘Squatter pigeons are nice to eat.’ (Tsunoda 1998: 355)
- (55) a. *nupa-ngku kamu-Ø kanyji-lku*
bark.container-N.INST water-ACC carry-PURP
‘[Someone will carry water in a bark container.’ (Tsunoda 1998: 365)
- b. *nupa-Ø kamu-wu kanyji-ri-lku*
bark.container-ACC water-DAT carry-V.INST-PURP
‘A bark container is for carrying water.’ (Tsunoda 1998: 361)

ワルング語のこれらの例をはじめとし、より広範な言語の掘り起こしによって、属性叙述の具現化の仕方が言語間で連続相を成していることが見えてくる可能性があるとは、角田太作氏（私信）の指摘である。コリヤーク語のように、形態的な標識と統語的な操作の両面から属性叙述がおこなわれる言語を1つの極とすると、その対極には属性叙述が形態的にも統語的にも形として顕現しにくい言語が位置づけられるであろう。そして、形態的には明確な形式はないが、統語操作により属性叙述が表わされるワルング語や、属性叙述専用ではないが、属性叙述に用いられるのを典型とする「ハ」を持つ日本語（標準語）はその中間に位置づけられるであろう。そして、さらに広範な属性叙述のデータが蓄積されていけば、中間にさまざまな言語のバリエーションが位置づけられることになるであろう。

以上、叙述類型論の今後の新たな展開が予見されるが、まずはコリヤーク語の属性叙述について、叙述類型論のこれまでの知見を参照しつつ整理をおこなった次第である。

略語一覧

単 = 単数 双 = 双数 複 = 複数 主 = 主語 目 = 目的語

1 = 1 人称 2 = 2 人称 3 = 3 人称 絶 = 絶対格 能 = 能格 所 = 場所格

具 = 道具格 方向 = 方向格 沿 = 沿格 完了 = 完了相 不完了 = 不完了相
 継続 = 継続相 結果 = 結果相 反復 = 反復相 使役 = 使役態 挿入 = 挿入母音・子音

参 照 文 献

- Brown, Keith, Anne H. Anderson, Laurie Bauer, Margie Berns, Graeme Hirst, and Jim Miller (eds.) (2006) *Encyclopedia of language & linguistics*. Second edition. Oxford: Elsevier.
- Comrie, Bernard (1985) Derivation, inflection, and semantic change in the development of the Chukchi verb paradigm. In: Jacek Fisiak (ed.) *Historical Semantics—Historical word formation*, 85–96. Mouton: Berlin.
- Davison, Alice (1980) Peculiar passives. *Language* 56: 42–66.
- Dixon, Robert Malcom Ward (2004) Adjective classes in typological perspective. In: Robert Malcom Ward Dixon and Alexandra Yurievna Aikhenvald (eds.) *Adjective classes, a cross-linguistic typology. Explorations in linguistic typology 1*, 1–49. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Dunn, Michael John (1999) A grammar of Chukchi. Unpublished doctoral dissertation, Australian National University.
- Fernald, Theodore (2000) *Predicates and temporal arguments*. Oxford: Oxford University Press.
- Geniušienė, Emma (1987) *The typology of reflexives*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Givón, Talmy (2001) *Syntax: an introduction Vol. I*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Goldberg, Adele (2001) Patient arguments of causative verbs can be omitted. *Language Sciences* 23: 503–524.
- 岩男考哲 (2008) 「叙述類型研究史 (国内編)」益岡隆志 (編)『叙述類型論』163–191. 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (2004) 「軽動詞文としての『青い目をしている』構文」『日本語文法』4(1): 22–37.
- 影山太郎 (2006) 「外項複合語と叙述のタイプ」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編)『日本語文法研究の新天地 1』1–21. 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (2008) 「属性叙述と語形成」益岡隆志 (編)『叙述類型論』21–43. 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136: 1–34.
- Kageyama, Taro (2006) Property description as a voice phenomenon. In: Tasaku Tsunoda and Taro Kageyama (eds.) *Voice and grammatical relations*, 85–114. Amsterdam: John Benjamins.
- 亀井 孝・河野六郎・千野栄一 (編著) (1996) 『言語学大辞典 第6巻 述語編』東京: 三省堂.
- 加藤重広 (2010) 「北奥方言のモダリティ辞」『北海道大学文学研究科紀要』130: 125–157.
- Kibrik, Aleksandr Evgen'evich, Sandro Vasil'evich Kodzasov and Irina Anatol'evna Muravyova (2004) *Language and folklore of the Ahtor people*. Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- 工藤真由美 (編) (2007) 『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』東京: ひつじ書房.
- 呉人 恵 (1999) 「チュクチ・カムチャツカ語族の母音調和に関する一考察」『富山大学人文学部紀要』30: 49–64.
- 呉人 恵 (2001) 「コリヤーク語の出名動詞と名詞抱合」津曲敏郎 (編)『環北太平洋の言語』7: 101–124. 大阪: 大阪学院大学情報学部.
- 呉人 恵 (2002) 「コリヤーク語の名詞句階層と格・数標示」『アジア・アフリカ言語文化研究』62: 107–125.
- 呉人 恵 (2009) 「コリヤーク語の形容詞—その動詞的および名詞的性格と類型論的位置づけ—」『アジア・アフリカ言語文化研究』77: 35–62.
- Kurebito, Megumi (2001) Noun incorporation in Koryak. In: Osahito Miyaoka and Fubito Endo (eds.) *Languages of the North Pacific Rim* 6, 29–58. Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Kurebito, Megumi (ed.) (2001) *Comparative basic vocabulary of the Chukchee-Kamchatkan language family: 1*. Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Li, Charles and Sandra Thompson (1976) Subject and topic: a new typology of languages. In: Charles Li (ed.) *Subject and topic*, 457–489. New York: Academic Press.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から」益岡隆志 (編)『主題の対照』

- 3-17. 東京：くろしお出版。
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」益岡隆志 (編) 『叙述類型論』3-18. 東京：くろしお出版。
- 益岡隆志 (編) (2008) 『叙述類型論』東京：くろしお出版。
- 松本克己 (2007) 『世界言語のなかの日本語 日本語系統論の新たな地平』東京：三省堂。
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』東京：刀江書院。
- 箕浦信勝 (1989) 「チュクチ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典 世界言語編 第2巻』925-932. 東京：三省堂。
- Nedjalkov, Vladimir Petrovich (1994) Tense-aspect-mood forms in Chukchi. *Sprachtypologie und Universalienforschung* 47(4): 278-354.
- Perlmutter, David and Paul Postal (1984) The 1-advancement exclusiveness law. In: David Perlmutter and Carol Rosen (eds.) *Studies in Relational Grammar 2*, 81-125. Chicago: University of Chicago Press.
- Poudel, Tikaram (2007) Ergativity and state/individual level predications in Manipuri. <http://ling.unikonstanz.de/pages/home/tafseer/manipuri-stuttgart.pdf>
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』東京：育英書院。(1995年復刻，くろしお出版)
- Stassen, Leon (1997) *Intransitive predication*. Oxford: Clarendon Press.
- Stassen, Leon (2005) Predicative adjectives. In: Martin Haspelmath, Matthew S. Dryer, David Gil and Bernard Comrie (eds.) *The world atlas of language structures*, 478-481. Oxford: Oxford University Press.
- Tsunoda, Tasaku (1988) Antipassives in Warrungu and other Australian languages. In: Masayoshi Shibatani (ed.) *Passive and voice*, 595-649. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Tsunoda, Tasaku (1998) Applicative constructions in Warrungu of Australia. In: Anna Siewierska and Jae Jung Song (eds.) *Case, typology and grammar*, 343-373. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』東京：明治書院。
- Zhukova, Alevtina Nikodimovna (1972) *Grammatika korjaksogo jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

執筆者連絡先：

〒930-8555 富山県富山市五福3190

富山大学人文学部

kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp

[受領日 2009年12月2日

最終原稿受理日 2010年6月7日]

Abstract**Property Predication in Koryak: Focusing on Topicalization**

MEGUMI KUREBITO

University of Toyama

This paper argues that what are traditionally called “qualitative adjectives” in Koryak (the Chukchi-Kamchatkan language family) essentially correspond to the property predication type proposed by the newly developed predication typology in the field of Japanese linguistics. The argument is based on two observations. First, the form can be derived not only from adjective stems but also from other word class stems, including verbal stems. Second, the form shows antipassivization or violations of the general structural constraint of this language, such as intransitive conjugation of transitive stems or promotion of oblique nouns to the absolutive case; all of these are morphological and syntactic manifestations of topicalization.

Further, a property-predication-type sentence is mutually convertible with its corresponding event-predication-type sentence; this is a strategy aimed at reducing the constraints of temporal stability inherent in each word class. A language such as Koryak, which recognizes the difference between property predication and event predication with both morphologically and syntactically clear forms, has hitherto not been discussed in the field of languages worldwide. Thus, this paper suggests a possibility for broadening the perspective of the new predication typology.